廣澤和郎全集

第六卷

廣津和郎全集

第十六巻

広津和郎全集　第六巻
定価四二〇〇円
昭和四十九年四月一日印刷
昭和四十九年四月十日発行
著者　広津和郎
発行者　高梨茂
印刷者　山元正宜
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

広津和郎全集　第六巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

青麦　七
狂った季節　二五七
真理の朝　四〇一
あとがき

小説　六

青麦

第一章

一

「尾形さん、お電話でございます」と給仕が電話口で云った。

「おいおい、怪しからんな。又春江だろう。仕事中にそうそう電話をかけられると、他の者の邪魔になると、今度俺から一つびしりと極めつけて置いてやるからいい」尾形貞蔵とテーブルを挟んで腰かけている佐伯繁樹が、描きさしの漫画の筆を一寸休めてにやりと笑った。

「ふふん」貞蔵は探ったそうに笑いながら、箱もなく壁にむき出しにくっついている受話器の方へ立って行った。

十坪ほどの事務所で、大きな仕事机が一つ真ん中にあり、それを取りかこんで尾形も佐伯も給仕も会計係の熱田老人も、みな坐っていると云ったような殺風景さであった。仕事が済むとその仕事机はピンポン台に早変りした。もともと佐伯の注文で、ピンポン台になるように初めから作らせたものであった。

「誰です？」又春江が時も場所も構わず、返事に困るような事を云い出すのではないかと思って、貞蔵は眉をしかめて、態と不機嫌な声を出したが、

「お兄さんですか？」

「おおフミヨか？」

妹の声だったので、急に引緊った顔付になった。

佐伯は逆に緊張して、貞蔵の背中を見戍っていたが、妹と聞いて、

「何んだ」とこれは拍子抜けのした顔をした。

「お父さまが……」
「なに、お父さんが？……お父さんがどうなすったんだ？」
「又お倒れになりましたの」
「なに、お父さんがお倒れになった？　いつ？」
「今し方ですの。——お兄さん、直ぐいらっしゃって」
「よし、行く」
受話器をかけた貞蔵の顔は真青であった。とうとう来るべき時が来た。一番恐れていたその時が。——胸が烈しく波打って来た。
「余程お悪いのか？」今の今までにやにやと彼を冷かしていた佐伯の顔も、ショックを受けて緊張していた。
「よくは解らないが、何しろ二度目だからな」
「そう、大変だな。直ぐ行って来給え」
「うん、それじゃ行って来る。このポスターは親父の家に行って若し少しでも暇があったら描き上げるから、明日馬場君、君御苦労だが取りに来て呉れないか」と貞蔵は給仕の方を振向いた。
「そんなものは置いて行ってもいいだろう。俺が仕上げて置くから」
「いや、もう少しなんだ。一寸仕上げをすればいいんだから」
彼は描きかけていたポスターの画用紙を丸めて新聞紙に包み、急いで外套を着た。
「今度は親父もいよいよいけないかも知れない」とビルディングの階段を下りながら考えた。若しいけないとなれば、ここ暫く出て来るわけに行くまいから、その事を春江に電話をして置かなければなるまい。
それは事務所でフミヨからの電話を聞いた時、直ぐ思った事であったが、何ぼ何でも親父の重態の電話がかかって来たのをみんなが知っている前で、あの事務所の壁の受話器を続けて取り、春江に電話をかける事は遠慮された。
有楽町の停車場に這入る前に、彼は駅前の公衆電話に飛込んだ。
「マダムいる？」
「一寸お待ち下さい」
電話に出たのは女給の君代であった。こっちが急迫した心持でいるせいもあるであろうが、随分待たされた気がした。恐らくまだ寝ていたのであろう。
「もしもし、貞蔵さん？」
やっと受話器を取る音がして、チリチリと喉にいりつくような春江の声が聞えた。甘味を帯びたか細い声であるが、電話で聞くと直接に聞くよりも尚の事喉にいりつくように聞えた。呼吸器病特有のあのいりつき方である。
「まだ寝ていたの？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そうよ、だって朝の九時に寝たんですもの」
「相不変不摂生な生活だな」そう軽く云いながら、昨夜は誰が泊ったろう、あの肥った実業家かそれともカーキー色のマントか、と貞蔵は考えたが、そんな事は口に出さなかった。
「実はね、親父が悪いらしいんだ。それで今から僕吉祥寺の家に行かなければならないんでね、当分会えないかも知れないと思って電話をかけたんだよ」
「あら、お父さまが……」
「ああ。二年前に一度倒れたが、今度が二度目なんだ。脳溢血の二度目ではもう駄目かと思うんだ」
「まあ、御心配ね」
「どうせ一度は来る事だけれどね、何しろ親父は僕を寄せつけないだろう、表向き勘当というわけではないけれど、あれ以来僕がたずねて行っても、こっちを振向きもしないだろう。——それだから、妹なんかしきりにそれを心配しているので、今度は親父の最後に無理にその前に僕を坐らせて、一場面どうしてもなければならないという情勢なんだよ。そいつが考えると苦手なんだけれど……」
「そんな事おっしゃらずに、直ぐ行って上げるといいわ。そしてお父さまと仲直りなさるがいいと思うわ」
「そりゃそうだよ。僕の方では親父に敵対しているつもりはないんだもの」

電話が沈んで来た。
「それじゃ」
「行ってらっしゃいまし」
彼はその電話で吉祥寺に行く事の佗しさが一層募らされた気持で、公衆電話の箱を出た。

二

ラッシュ・アワーをはずれているので、プラットフォームに人影はなかった。曇り日で冷たい風が吹いていた。今年は山に雪が多いというが、秩父あたりでは又ひと降り降っているのではないかと思われるような風であった。
貞蔵はこの三年ほどの間に、父に幾度も会っていなかった。その時々の父の顔を彼は思い出していた。
美術学校を出ると、彼の青年の情熱は最初彼を表現派風の画風に走らせた。もっとも表現派も立体派も未来派も超現実派も、あらゆる近代的な画風が、青年の情熱を駆り立てていた時代で、彼は反古典派というだけの一致から、あらゆる近代派的な傾向を含めた一つの団体を、若い者同士で組織していた。その団体の中から、急進派の何人かがとうとう左翼美術の方へ走って行った。貞蔵もその一人で、彼は左翼の外廓

運動の一つであったプロレタリア美術団体の中に突入して行った。――胸に情熱の燃えている青年達が、われもわれもと社会運動に関心を持って行ったあの時代である。

そこに弾圧が来た。左翼運動の中心は勿論、その外廓運動のあらゆる分野が僅の期間に潰滅した。

貞蔵は芸術運動に携わっていただけなら、十日か十五日で済んだのであるが、その左翼頽勢の末期に近く、沢山の犠牲者の救援に動いたモップル方面で多少働いたものだから、とうとう半年近くも各警察から警察へとタライ廻しを食わなければならなかった。

併し結局不起訴になって、へたへたに疲れ、脚気と心臓衰弱とにむくんだ身体で、彼は吉祥寺の父の家に帰って来た。

丁度その少し前、貞蔵が留置場生活を送っている間に、父は第一回目の脳溢血で倒れた。それは軽かったので、貞蔵が疲れた足を引きずり引きずり吉祥寺の家に辿りついた時には、父は起きていた。

「唯今戻りました」

この一家は東京の山の手風の礼儀作法の厳格な一家であった。子供の時分から貞蔵は朝起きた時、夜寝る時、外出の時、帰宅の時には、父の前に両手をついて、「お早う」「御機嫌好う」「行ってまいります」「唯今」と丁寧に時儀をする習慣をつけられていた。

成人してからはいつかその丁寧な礼儀が幾分略式になって来ていたが、併し留置場からの久しぶりの帰宅に、彼は子供時分のように父の前に両手をついたのである。

「唯今戻りました」

父は書斎で机に向い読書をしていた。けれども彼がその部屋に這入って行った時、ちらりと彼の方を振向いただけで、直ぐ書物の方へ眼を戻し、それきり黙然と姿勢を崩さず振向こうとしなかった。

貞蔵は両手をついたまま父の様子を暫く見戍っていた。夏の事で、父の書斎の窓の外の山吹の葉は、強い陽を逆光的に受け、燃え立つような黄色に光っていた。

取りつく島のない感じで父の横顔を見つめていると、彼の心にはいろいろの思いが入り乱れて来た。自分のいない間に父が脳溢血で倒れたので、「その後の御容態は如何ですか？」と先ずそれを父に訊ねるつもりであった。けれどもそんな事の云い出せない程父の態度は冷然としていた。

弁護士の岡倉が一度父に警部に会って貰い、今後貞蔵の監督を自分がするからと一言云って呉れれば、それだけでも警部の感情が和ぎ、貞蔵が早く出られるようになると思い、その事を父に相談に来たら、父は、「どうかその点は御ゆるし下さい。私も嘗ては公職にあったものですから、国体に反対する者のために口を利く事は、たといそれが自分の子供であ

っても到底出来ません。この老年になってそういう思いは私にさせないで下さい。貞蔵は今は子供ではありません。彼も覚悟あってやった事でしょうから、男らしく裁きを受けるべきです」と答えたというのを、貞蔵は岡倉から聞いていた。その弁護士も父がつけて呉れたのではなく、画家の友人たちが頼んでつけてくれたものであった。

貞蔵はそれを聞いた時、「親父はやっぱり親父だ」とその頑固さに或尊敬を払った。父と子の思想の背馳が当然此処まで来たので、こうなれば涙で妥協などして呉れない方が却って気持がいいとさえ思ったものであった。

併し今父の横顔を見つめていると、そうした昔の武士を思わせるような純粋な頑固一徹で自分に冷然としているのだとばかりは思われなくなって来た。その頑固一徹の仮面の下に、父が老年のイゴイズムを隠しているのではないかという疑念が湧いて来ないではいなかった。

△△省の局長まで行って、十年ほど前から役を退き、晩年を平穏に暮していた父は、その晩年の平穏を非常に愛していた。父の眼にはこの自分がその父の晩年の平穏を乱したものとして映っているのではないか。前△△局長尾形貞之の名誉を傷けたものとして映っているのではないか。その事が一番大切なために、それを乱す自分が父に取っては憎くて憎くて堪らないものとなったのではないか。

モップル関係の記事解禁になった時、自分の名の上に「前△△局長尾形貞之氏長男」と父の名がかぶさっていた事を、やはり弁護士から聞いて貞蔵は知っていた。「名流子弟の赤化」の中に自分の名が入れてあったという事も彼は聞かされていた。

父の晩年の心を乱したという事は、それを考えるだけで貞蔵には堪らないものであった。若し父の態度の中に何処か温かさが見えたら、その点を自分は父の膝下にひれ伏して詫びたかも知れない。けれども今父を眼の前に見て父から受けるものは、父が人情の妥協を排して、物の考え方の上から断じて自分を寄せつけまいとしているような峻厳なものではなかった。そうではなくて自分というものの存在をなるたけ考えまい、父の晩年の平穏を守るために自分というものを無視しようとしている、恐らく一家を不名誉に陥れた自分を、一家の面目のために寄せつけたくないと思っている、消極的な自己防衛の態度としか思われなかった。

父に対する反抗心が彼の胸に湧いて来た。

そこで彼は立上り、「恐らくお父さんは僕の顔を見たくないのでしょう。よござんす。僕もなるたけお父さんの眼に触れないようにします」と心の中で叫びながら父の部屋を出た。

興奮のためにたださえ弱っていた心臓は、数え切れないように急速に脈を搏っていた。身体が小刻みにぶるぶる顫える

ようで膝頭がガクガクした。
大股に廊下を歩いて父の部屋から遠ざかって行ってやろうと思いながら、四五歩あるいただけで彼はそこにうずくまり、心臓の鼓動を鎮めなければならないように不安になって来た。
フミヨが駈け寄って来た。フミヨは父と兄との対面を心配して、さっきから廊下の隅に佇んでいたのである。
「お兄さんどうなすったの？」
「いや、大した事はない。少し休んでいれば癒るよ。何しろすっかり心臓をやられたのでね」
フミヨは台所に駈け出して行って、手拭のしぼったのを持って来た。
「これを胸にお当てになったら？」
「うん、ありがとう、ありがとう」
貞蔵は妹の手から手拭を取って胸に当てた。肌を開けると長い間湯に這入らない皮膚がむっと臭かった。
「どう、お兄さん？」
心配そうに窺き込んで来る妹の顔を見ながら、貞蔵は妹もすっかり年頃になったと思った。
少し心臓がおちついて来ると、「ありがとう、ありがとう。フミヨもすっかりもう年頃だな」と優しい冗談が口から出た。
「あら、厭だ。でも、少しは快くなって？」
「ああ、大分快くなって来たよ。それじゃ肩を貸してお呉れ、立上るから」
「大丈夫？」
「ああ、もう大丈夫だよ」
貞蔵はフミヨの肩に手をかけて静かに立上った。この騒ぎをすっかり聞えている筈に違いない父が、廊下にも出て来なければ声もかけないその心持を、彼の神経は尖りながらさぐっていた。が、それだけフミヨが何の隔てのない親しさで世話をして呉れる事が嬉しかった。
「僕の身体臭いだろう。何しろ半年も湯に這入ってないんだからね」
「そんな事ないわよ。——直ぐお湯を立てさせますわ」
「そいつはありがたいが、当分まだ湯に這入るわけには行かないよ。何しろこの心臓だから」
「そうね。——まあ、ほんとうにお可哀想ね」
随分いじめられたのね、と云う調子でフミヨは眉をひそめた。「それじゃ、後でわたしがアルコールで拭いて上げますわ」

三

離れに六畳が二つ隣り合せに並んでいたが、それが子供部

屋――つまり貞蔵とフミヨとが子供の時分から住んでいた部屋であった。そこから貞蔵は中学に通い美校に通い、フミヨは女学校に通った。フミヨがその六畳の一つに蒲団を敷いて呉れたので、貞蔵は横になった。

「いや、お父さんは僕の帰って来た事をお喜びになってはいらっしゃらないようだ。僕は直ぐ出て行こう」と貞蔵が興奮して云うと、

「何云ってらっしゃるの。そのお身体で。――お父さまのお部屋とこんなに離れているんですから、暫く此処に保養していらっしゃい。ね、何より脚気がお癒りにならなければ、何をなさろうと云っても、出来ないじゃないの」

けれども、柔かな蒲団の上に寝て見ると、あのタライ廻しの六ヶ月の後で、何という足腰の安らかさであろう。貞蔵はこれを捨てて起上る気はなかった。

天井の杉板の木目や汚点――それは十年近く前の大嵐のあった晩、雨洩りがした後が汚点になったのであった。まだ中学生だった貞蔵は、天変地異に対する子供らしい好奇心にはしゃぎながら「わあっ」と云って台所からバケツを持って来て、その雨洩りの下の畳の上に置いた。その頃は母がまだ生きていたが――母はそれから一年ほどして死んだ――女中の代りに自分で駈け出して来て、濡れている畳を雑巾で拭いて呉れた。そんな記憶が貞蔵の胸に蘇生って来た。

障子の桟の一つ一つ、縁側の柱に爪でつけたような小さな横引きの幾筋――そんなものにもそれぞれ貞蔵は記憶があった。柱の横筋は自分がフミヨをそこに立たせて、彼女のお河童風の小さな頭の上に物指を当て、成長の跡の印をつけたものであった。

医者が来る前にと云って、フミヨは湯とアルコールを持って来て、貞蔵の顔や胸や手を拭いて呉れた。

「でも、ほんとうにひどい目に会ったわねえ」と彼女は脱脂綿にアルコールをひたしながら、度々眉をひそめて云った。

「ああ、でも、一年もタライ廻しを喰っている人間から較べれば、俺なんか何でもないよ。これでこんなにへこたれるなんていうのは、やっぱりインテリの鍛え方の足りなさだよ」

そういう言葉は貞蔵の胸に、運動の情勢の落日のような侘しさを思い出させた。――取調べの度に警部から聞かされたあらゆる左翼の分野の潰滅、たといそれに自分を威嚇しようとする誇張が含まれていたとしても、併し全体の情勢がどこまで追い込まれているかという事は彼にも略想像出来ていた。

医者が来た。医者も天井の汚点や柱の爪跡と同じように貞蔵には幼な馴染であった。母の主治医をしていたのも、自分が風邪を引いて学校を休む時診断書を書いて呉れたのも、みなこの医者であった。

吉祥寺附近が開け始めた時分、最も早く開業して、親切と

愛嬌とで患者に評判の好かったこの医者は、昔はマシマロのようにのっぺりと白いふくよかな顔をして、金縁の眼鏡の下に美しい八字髭を蓄えていたが、今見ると、この医者にもいつか老年の淋しさがその丸っこい肩のあたりに漂って来て、綺麗に分けた髪の毛には、三分の一近く白髪がまじっていた。

聴診器を耳に当て、自分の胸の上にこごみかかるようにしている医者の顔を下から見上げながら、貞蔵はこうして此処に帰って来て見ると、何もかもが昔のままであるという事が不思議な気がした。自分などが時代の渦巻の中に捲き込まれて苦戦苦闘をつづけていた間も、この医者は毎日毎日同じように患家をまわり、毎日毎日こうして聴診器を耳に当てていたのである。そして自分が暫くぶりで戦い疲れて帰って来て見ると、この医者は昔と同じように相変らず聴診器を耳に当てて、思案くさい顔をして自分の脈を数えてくれるのである。

「運動不足と湿気とから無理に起した脚気ですから、そう御心配な事はありません」診察を終ると、医者は手を洗い、タオルを使いながら云った。「朝晩散歩をなさるんですな」

「あの……心臓は如何でしょうか。時々息が止まりそうな程脈が早くなって来るんですが」

留置場で彼はその発作を起し、余りの苦しさに、「医者を呼べ。それでなければ殺せ」などと看守に怒鳴った事があるのを思い出した。その時は警察医が来てジガーレンを注射し、三日間彼は保護室で安臥させられたが、その後もそうした発作に時々襲われた。

「心臓？……ええ、大丈夫です。神経性のものです。聴診器で拝見しますと、心音の異状はありません。少しずつ運動がおつきになれば自然に癒ってまいります」

その診察は貞蔵にも合点が行った。何か心臓痼疾と云ったようなものになってしまったかと思っていたのが、そうではないと証明されたので、それだけでも胸の苦しさが軽くなって来たような気がした。

「よかったわね。わたしもそれで安心したわ。兄さんは直ぐ御丈夫になれてよ」医者が帰ると、フミヨは嬉しさに眼を輝かしながら云った。「何もお考えにならないで、少し静養なされば直ぐよくなってよ」

「うん、ありがとう。何もかもフミヨのお蔭だよ」

「あら、あんな事をおっしゃって」

「ねえ、フミヨ、お父さんは僕を憎んでらっしゃるんだろう？」

「……」フミヨは黙って暫く彼の枕許に坐っていたが、「そんな事を今お考えにならなくってもいいじゃないの」

「いや、併し聞きたいんだ。お父さんは僕の事を平生何と云ってらっしゃったい？　それを聞かしてお呉れ。僕の事が新聞に出た時何とおっしゃったい？　それを聞かしてお呉れ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com